

## 書評

北村厚著

## 『教養のグローバル・ヒストリー ——大人のための世界史入門』

(ミネルヴァ書房、2018年)

大庭 弘継

本書は、日本で刊行されている世界史の教科書を底本として、経済を中心に、気候変動や感染症なども変数として、世界史のイベントをビリヤードゲームのように連動するものとして描き出している。主役はネットワークであり、そのネットワークがグローバルにまで成長していく物語を描いている。教科書を底本としているため当然かもしれないが、出てくる用語は、既にわれわれが知っている世界史の知識で済んでしまう。世界史を愛好してきた人々にとって、世界史用語集に新たな名前が増える楽しみよりも、いままで知っていた知識が結びついていくという快感を味わうことができるだろう。

本書の重要な特徴は、ヨーロッパ中心主義も反ヨーロッパ中心主義も全く感じさせないことである。評者の個人的な見解だが、従来のグローバル・ヒストリー本の中には、ヨーロッパ中心主義の乗り越えを企図するあまり、逆にヨーロッパを過度に意識したものも多く見受けられる。しかし筆者は、世界とその歴史をフラットに描いている。世界中に貿易の基点が存在し、それらが結びつく歴史を描いている。筆者が描くグローバル・ヒストリーの中でのヨーロッパは、全体の中の一部として適切に納まっている。

だが一方で、この大きなネットワークにつながっていない地域は、本書の中盤に至るまでグローバル・ヒストリーとして語られていない。サハラ以南のアフリカや南北アメリカも、「大航海時代」以前はグローバルなネットワークには入っておらず、描けなかったためであろう。もちろん、それはアフリカやアメリカの内部でネットワークが存在しないことを意味しない。工夫によって描き出せたかもしれないが、現時点でのネットワーク中心歴史観の限界といえるかもしれない。

さて本書は、ドイツ現代史という著者自身の専

門領域を踏み越えた異例の著作であり、批判が多いかもしれない。一般に『グローバル・ヒストリー』を冠した著作は、実際には地理的にも時間的にも限定された時代史・地域史であることも多い。また、概説・通史的なものは功成名を遂げた研究者がやるべきものという「雰囲気」も存在する。そのうえ、教科書を底本として本を執筆することに反発する研究者もいるだろう。

だが執筆当時、高校教員であった著者が、世界史のダイナミズムを面白く伝える方法を探究した結果が本書であり、本書は研究書として執筆されたわけではない。とはいえ、最新の研究成果が織り込まれた幾つもの教科書を底本とし、著者本人も様々な文献を調査したうえで、世界史をグローバルなネットワークの通史として提示しなおすことは、まさに研究者が行うにふさわしい取り組みであろう。いいかえれば、従来は研究者の仕事と見なされていなかった取り組みかもしれないが、研究者にしかできない取り組みである。その意味で本書は、その内容の面白さに加えて、研究者が取り組むべき新たな仕事を切り開いたという点でも、一石を投じた野心作である。